



この絵図は、文久3年版の金鱗堂尾張屋清七版「千駄ヶ谷・鮫ヶ橋・四ツ谷絵図」の一部である。尾張屋清七版の「千駄ヶ谷・鮫ヶ橋・四ツ谷絵図」は、嘉永3年(1850年)に初版が出て、増補改正(再版・修印)が繰り返された。

本来の目的は、武家、社寺を掲載する今日の住宅地図であり、百姓、町人の名はない。

この絵図では右が北の方角になる。森川出羽守の中屋敷と永井信濃守の下屋敷の間の通りが、今日の新宿通り(甲州街道)を四谷三丁目で南に入り、青山一丁目に出る外苑東通りである。

文政年間、増田繁亭金太郎の住居は、一行寺(現在の浄土宗一行院)隣の「紀 久野丹波守」の屋敷にあった。現在の青山権田原交差点の明治記念館の地である。

紀州久野丹波守は、代々紀州徳川家の家老で、伊勢(三重県)の田丸城の城代を兼ねていた。

その向かいの花房家については、水野忠暁の「草木錦葉集」に、水野忠暁が「極白の斑(入り)南天」を譲ったと記されている(「草木錦葉集 卷之六 十二丁」)。

増田繁亭金太郎は、水野忠邦の天保の改革により奢侈禁令に触れ、闕所の罪(けっしょのつみ)により江戸四谷の大木戸門外に追放の憂き目に遭った。理由は、鉢物が十両、百両といった高価で取引されるようになったため自身も莫大な利益を上げたこと、園芸ブームが身分を越えて広まり身分制社会を基礎としていた幕府体制と相容れなかったことである。

闕所の罪の後、増田繁亭金太郎の家屋敷は紀州徳川家の下屋敷となり、家老久野丹波守の住居となったのである。

この青山権田原を千日谷に入ると、菩提寺の浄土真宗本願寺派林光寺に至る。

林光寺は、紀州徳川家の信仰厚く、紀州徳川家から送られた寺宝も現存する(非公開)。

余談であるが、大正年間、母方の祖父丸地弁信(勇)は、一行寺(現在の浄土宗一行院)で修行して得度を得た。時代は下って昭和30年代、父方の叔母の増田佐久良は明治記念館で結婚披露宴を催したと言う。

さて、その後の増田繁亭金太郎の住居であるが、絵図の上方(西側)に「(千駄ヶ谷)八幡宮」があり、紀州徳川家の下屋敷がある。その隣の「百姓地」と広がる「畑」が在所であった。

この地は、明治初年に徳川宗家十六代徳川家達公や天璋院篤姫の住まいとなった「千駄ヶ谷徳川屋敷」であり、今日の東京体育館である。

もともと、増田繁亭金太郎の普段の住まいは、紀州徳川家下屋敷の千駄ヶ谷八幡寄りの「町屋」に住まいがあった。同じ尾張屋清七版の絵図の中には、下屋敷の角を取るように「植木屋」と記入されている年代もある。

北側の「畑」は、内藤駿河守の下屋敷とともに現在の新宿御苑の一部を成している。東側の畑は、「千駄ヶ谷徳川屋敷」の建てられた頃は徳川家の「茶畑」だったらしい。

絵図では切れているが、千駄ヶ谷八幡の西から続く「畑」は玉川上水葵橋(西新宿一丁目交差点付近)まで続いていた。今日のJR東日本本社、JR東京総合病院などが含まれる。

この付近は、第一次世界大戦の船舶運送業で「虎大臣」の異名を取った山本唯三郎が大正初年に所有した。

増田家も4代目増田謹三郎が牧師となって幸徳秋水や菅野スガ、平民社を支援した後に財を失って、この虎大臣に土地を担保に借財をするまでになった。

ただし、屋敷は獲られなかった。どうも、武蔵国久米から出た増田家に対して、岡山県久米郡鶴田出身で苦勞人であった山本唯三郎には温情があったようである。(2008.2.11)

(参考文献)

- ・「千駄ヶ谷・鮫ヶ橋・四ツ谷絵図」文久3年 金鱗堂尾張屋清七版
- ・「草木錦葉集」文政12年(1829年) 水野忠暁
- ・「花葵 徳川邸おもいで話」1998年 保科順子 毎日新聞社
- ・「千駄ヶ谷の歴史」昭和60年 矢島 輝 鳩森八幡神社

Copyright (C)2008 増田信敬 (masuda nobutaka) All rights reserved

<http://soumokukihinkagami.com/>